

# ドロービシの感情論

本 間 栄 男

キーワード：ドロービシ (Moritz Wilhelm Drobisch, 1802–1896),  
心理学史, 『自然科学的方法による経験心理学』 (1842),  
感情 (Gefühl), 情動 (Affekt)

## 第1節 ドロービシ略伝

第1節第1項 ドロービシの生涯

第1節第2項 ヘルバルトとドロービシ

## 第2節 ドロービシ心理学の特徴

第2節第1項 テクスト

第2節第2項 自然科学的心理学の方法

第2節第3項 経験心理学

第2節第4項 分類

## 第3節 ドロービシの感情論1

第3節第1項 ドロービシの(狭義の)感情論

第3節第2項 知的感情

第3節第3項 混合感情

## 第4節 ドロービシの情動論

第4節第1項 ヘルバルトの情動論

第4節第2項 ドロービシの情動論

第4節第3項 ドロービシの情動品目の分類

## 第5節 ドロービシの感情論2

第5節第1項 ドロービシの欲求論における感情的なもの

第5節第2項 能力論批判とヘルバルト的感情論

## 第6節 まとめ

モーリツ・ヴィルヘルム・ドロービシ (Moritz Wilhelm Drobisch, 1802–1896)<sup>1)</sup>の名は、少し詳しい心理学史には必ず出てくる。だが、ヘルバルト心理学の最初の理解者として名前と著作名が挙げられるものの、それ以上の言及がなされることはほとんどない。たしかに、ドロービシは専門の心理学者ではない。そもそも当時専門の心理学者がいたかどうか、という制度上の問題はさておき、ドロービシは数学、特に天文学の専門家として出発し、論理学や統計学、最終的に哲学に至る途中で心理学に立ち寄っただけの人物である。〈ドロービシの心理学〉を専門に扱った論文は見当たらないし、ましてその感情論に焦点を合わせたものなど皆無だろう。けれども、ヘルバルト以外のヘルバルト派の最初の感情論として、他のヘルバルト派の人々の心理学を理解するよい前提となるものと思い、この人物の心理学書を取り上げることにした。

本論文ではまずドロービシの伝記的事実を簡単に記述し、特にヘルバルトとの関係についても註記した (第1節)。次に、ドロービシの心理学の特徴について触れた (第2節)。続いてドロービシの感情論に入り、これを3つに分割する。最初に狭義の感情論 (第3節)、次に特徴的な情動論 (第4節)、最後に他の部分で扱われた感情論 (第5節) というように。最後にまとめが来る (第6節)。

## 第1節 ドロービシ略伝

ドロービシの生涯についての基本的な二次文献は2つしかない。1つは大学の同僚であったマクス・ハインツェ (Max Heinze, 1835–1909)<sup>2)</sup>による追悼文、もう1つは孫のヴァルター・ノイバート＝ドロービシ (Walther

1) 「ドロービッシュ」「ドロービシュ」「ドゥロービッシュ」等の日本語表記があるが、本論文では「ドロービシ」で統一する。

2) 1875年以来ライプツィヒ大学哲学部の哲学史正教授となっていた：[https://research.uni-leipzig.de/catalogus-professorum-lipsiensium/leipzig/Heinze\\_838/](https://research.uni-leipzig.de/catalogus-professorum-lipsiensium/leipzig/Heinze_838/)。ハインツェと同時にライプツィヒ大学に赴任したのがヴィルヘルム・ヴントである (ヴント 2002: 311)。

Neubert-Drobisch, 生没年不明)<sup>3)</sup>による著作である (Heinze 1897; Neubert-Drobisch 1902)。大学での経歴については前者が、個人生活については後者が優れている。一次文献としては、後述のドロービシの日記ノート、書簡があるが、今回は参照しなかった。また、三次文献としてインターネットで参照できる伝記がある<sup>4)</sup>。これらを参考にしてドロービシの伝記を簡単にまとめよう。

### 第1節第1項 ドロービシの生涯

我々のドロービシの父親カール・ヴィルヘルム (Karl Wilhelm Drobisch) は 1755 年 9 月 7 日ドレスデンで生まれた。家業は不明。最初の妻との結婚の後、ライプツィヒに移住して、市の書記官の役職に就いた。この結婚で 6 人の子供をもうけたが、大人になるまで育ったのは娘 2 人だけだった。最初の妻が 1790 年末に亡くなると、まだ 10 歳と 4 歳だった 2 人の娘が残され、子供らの面倒を見るためにもカール・ヴィルヘルムは再婚を勧められた。が、断った。断ただけでなく、妻となるべき人物像について（ほとんど印刷本 1 ページ相当の）理想を知人宛の手紙の中で述べたいだけ述べている (Neubert-Drobisch 1902: 1-2)。おそらく結婚しないための言い訳だったのだろう。だが、その 4 年後の 1795 年、知人の判事の妹レナタ・ドロテー・ヴィルヘルミネ・クローツ (Renata Dorothee Wilhelmine Klotz, 1762-1822) と知り合いになった。彼女はライプツィヒ郊外のグリマ (Grimma) に住み、33 歳で、当時 40 歳のカール・ヴィルヘルムとは年齢的にも身分的

3) 1887 年に大学生だったということから、1860 年代後半の生まれと推測できる。この人物は数冊の著作があるが、内容はわからない。後述のようにドロービシの生き残った 3 人の娘のうち長女オイジェニエ (Eugenie, 1829-1908) は未婚なので、ファニー (Fanny, 1839-1897) かコンスタンツェ (Constanze, 1842-1902 頃) の息子。祖父ドロービシの伝記の中にファニーの結婚と孫息子の誕生についての言及があるので、おそらくファニーの息子と思われる (Neubert-Drobisch 1902: 123-124)。ちなみに、孫の著作には自己紹介めいた文章が全く無い。

4) Sächsische Biografie: [https://saebi.isgv.de/biografie/Moritz\\_Drobisch\\_](https://saebi.isgv.de/biografie/Moritz_Drobisch_) (1802-1896)。この項目を書いたのは Gerald Wiemers。日本語では：森戸 1943。

にも釣り合っていた。カール・ヴィルヘルムはすぐに求婚し、最初の手紙に添えて前述の理想の妻像についての文書のコピーを送ったという（それでも断られることはなかった）。4ヶ月半の文通での交際期間を経て、1795年11月1日に2人は結婚した。この間にやりとりされた手紙は製本されてひ孫のノイバート＝ドロービシの手元にまでは保存されていたという（その後の行方は不明）。

カール・ヴィルヘルムの2度目の結婚ではなかなか子供に恵まれず、1802年8月16日にようやく男の子が生まれた。弱々しく、死産かと思われる、強く叩いてようやく産声をあげた。この弱々しい子供がその後94年生きることになる我々のモーリツ・ヴィルヘルム（Moritz Wilhelm）である。翌年末に弟のカール・ルードヴィヒ（Karl Ludwig）が生まれた。この結婚からは以後子供は生まれなかった。

ライプツィヒに住んだドロービシ家で、幼少時代は父親が息子たちに基本教育を施した。その後、初等教育のためニコライ学校（Nikolaischule）で兄弟は学ぶことになる。1813年10月19日、ライプツィヒの戦いに負けたナポレオン（Napoléon Bonaparte, 1769-1821）がライプツィヒ市を出て行く場面を、当時11歳のモーリツ少年は目撃していた。その後の動乱のなか、体調を崩していた父カール・ヴィルヘルムが1815年3月30日に亡くなった。残された財産として722冊の学術書（これはすぐに古本屋に売られた）と少なからぬ現金があり、このおかげで兄弟はさらなる教育を受けることができた。

そのあと兄弟は母親の故郷グリマにある王立学校で学んだ（兄は1815年10月13日に登録）。1817年1月1日から我々のドロービシは日記を書き始め、それは体裁や題名を変えながら死ぬ直前まで書き続けられた。孫のノイバート＝ドロービシがドロービシ伝のために最も参考にしたのがこれである（この日記の行方について本項末）。日常の細々としたことの記述から、のちにはアイディアノートになり、自作の詩も書きためられた。そのいくらかを

孫は引用している。この王立学校時代に我々のドロービシは天文学に関心を持った。同学校の数学と物理学の教授ハインリヒ・アウグスト・テプファー (Heinrich August Töpfer, 1758–1833) の影響である<sup>5)</sup>。1820年3月21日までグリマの王立学校にいて、そのあと我々のドロービシはライプツィヒに戻ることになる。

1820年3月28日にドロービシ（以下ドロービシといえば我々のモーリツのこと）はライプツィヒ大学に登録する。ここで数学教授カール・ブランダン・モルヴァイデ (Carl Brandan Mollweide, 1774–1825)<sup>6)</sup>に気に入られた。地図投影法の1つ「モルワイデ図法」に名前を残す数学者である。モルヴァイデに様々な数学教師としての職を紹介してもらい、数学教師としての鍛錬を積むことになった。この経験が意外に早い就職に繋がったことはまちがいない。

1822年3月6日に母親が亡くなった。この頃からドロービシは文学、特にロマン主義文学にのめり込んだ。当時のドイツではシェイクスピアがロマン主義文学として受け容れられていて、その演劇にも夢中になった。孫は1823年を「ドロービシの疾風怒濤時代」(Neubert-Drobisch 1902: 16)と呼んでいる。それは文学熱だけでなく、恋愛も絡んだ年だったからである。ドロービシは自分と弟の住んでいた下宿屋の女主人（職人の夫を失ってからは下宿屋を営んでいた）の次女エミーリエ・シャルロッテ・ライヒゼンリンク (Emilie Charlotte Leichsenring, 1802–1871) に恋をしたのである。ドロービシが作詞、弟カール・ルードヴィヒ作曲のバラッドが作られたのもこの情熱の時代ゆえだろう。

その間にも1823年9月21日には修士試験を受けた（もちろん合格）。そして1824年3月8日に「幾何解析論序説 (Theoriae analyseos geometricae prolusio)」というラテン語の論文を仕上げて、5月26日に教授資格を得た。

5) Deutsche Biographie: <https://www.deutsche-biographie.de/sfz82823.html>.

6) Deutsche Biographie: <https://www.deutsche-biographie.de/pnd100810853.html>.

22歳の哲学部の数学私講師が誕生したのである。

数学的諸学を教えながら、ドロービシは自らの研究の中心が天文学であると思っていた。1826年には哲学部の数学員外教授に任命されて、同年8月9日には就任演説を行い、「月の真の形について (De vera lunae figura)」を出版して天文学研究のプログラムを示した (Neubert-Drobisch 1902: 24)。この時、ライプツィヒ大学にはすでに天文学の員外教授としてアウグスト・フェルディナント・モービウス (August Ferdinand Möbius, 1790–1868) がいた。今日では数学者として、「メビウスの輪」で知られる人物だが、1816年以来ライプツィヒ大学に属し、ライプツィヒ天文台にも勤めていた<sup>7)</sup>。

1826年9月、ドロービシはゲティンゲン大学の天文台長カール・フリードリヒ・ガウス (Karl Friedrich Gauß, 1777–1855) を訪ねた<sup>8)</sup>。やはりガウスも今日では数学者として知られているが、同時代には天文学者としての名声も高かった (モービウスもガウスに学んだことがある)。ドロービシは出版したばかりの上記論文を手土産とした。ガウスとは天文学に関する話もしたが、最も熱心な話題だったのは音響学だったようである (Neubert-Drobisch 1902: 22–23)<sup>9)</sup>。ドロービシは後に音楽研究を行うことになる (*Über musikalische Tonbestimmung und Temperatur*. 1852)。

1825年3月10日、恩師のモルヴァイデが亡くなっていた。数学正教授のポストが空いていた。おそらくドロービシの員外教授就任は、モルヴァイデ

7) モービウスの業績について日本語で読めるものは以下：J. フォーベル, R. フラッド, R. ウィルソン編 (山下純一 訳) 『メビウスの遺産 数学と天文学』 東京：現代数学社 1995 (John Fauvel, Raymond Flood, & Robin Wilson (eds.), *Möbius and his band: Mathematics and astronomy in nineteenth-century Germany*. Oxford University Press, 1993 の訳)。この著作ではドロービシのことは全く言及されていない。ちなみに、モービウスもザクセン人であり、ライプツィヒ大学の生え抜きである。

8) 若い頃のガウスの書簡と若い頃のドロービシの書簡に表された心配事を比較検討した論文が以下：Zwahr 1987。ただし、両者の間の書簡の研究ではない。

9) ガウスとドロービシは書簡を交わしている。ドロービシ宛のガウスの手紙のごく一部がダニングトンのガウス伝に引用されている：ダニングトン 1976: 312。

の後任に据えようとした形式的手続きだったようである。1826年8月に員外教授になったばかりのドロービシはその年末に正教授に推薦された。当時24歳、若すぎる、という批判が起こったが、それを収めたのが哲学教授ヴィルヘルム・トラウゴト・クルーク (Wilhelm Traugott Krug, 1770–1842) だった<sup>10)</sup>。ともあれ、ドロービシは数学の正教授に昇任する。

1827年9月13日、ドロービシは前述のエミーリエと結婚した。この結婚で3人の息子と6人の娘が生まれたが、息子たちは全て夭折、娘たちの中でも母親の死まで生きていたのは3人だけだった。妻エミーリエは1871年3月31日に亡くなる<sup>11)</sup>。ドロービシの弟カール・ルードヴィヒは教会音楽の作曲家になり名声を得てアウグスブルクの楽団長になったが、1854年8月26日にコレラで亡くなった<sup>12)</sup>。

1830年の動乱を経て、1831年頃からドロービシは宗教にも関心を持ち始める。それは当時のコレラ流行という状況にも原因があったのかもしれない(1831年のヘーゲルの死因はコレラだった)。そしてその後うち続く家族の死も。その中で、数学者としてのメービウスを讃える新聞記事を読んで自らの不甲斐なさを嘆いたり、1832年には水星の太陽表面通過観測を行ったりしていた (Neubert-Drobisch 1902: 37–38)。この年からドロービシは論理学の講義を始めている。この研究は1836年に『最単純関係に従う論理学の新表現 (*Neue Darstellung der Logik nach ihren einfachsten Verhältnissen*)』に結実する。この著作は論理学史で一定の位置を占め、日本語にも翻訳されている<sup>13)</sup>。この著作は同僚のグスタフ・テオドア・フェヒナー (Gustav

10) このクルークは、フリードリヒ・エドゥアルト・ベーネケ (Friedrich Eduard Beneke, 1798–1854?) の『心理学スケッチ』が標的にした著作『感情といわゆる感情能力の新理論への基礎 (*Grundlage zu einer neuen Theorie der Gefühle und des sogenannten Gefühlsmögens*)』(Königsberg: Aug. Wilh. Unzer, 1823) を書いた人物である (本間 2020: 52, 註 30)。

11) 妻の死後、ドロービシは未婚の長女オイジェニエの世話になった。

12) この人物についてWikipediaに項目がある。作曲したいいくつかの音楽はYouTubeで聞くことができる。

13) 桑木厳翼・關山富 共述『ドロービッシュ氏論理學綱要』東京：東京専門学校出

Theodor Fechner, 1801–1887) にプレゼントされた。フェヒナーから送られた『死後の生についての小書 (*Das Büchlein über das Leben nach dem Tode*)』(1836) へのお返しである<sup>14)</sup>。

1840年に『宗教哲学の基礎 (*Grundlehren der Religionsphilosophie*)』が出版された。その年にドロービシはライプツィヒ大学学長に選ばれる(1840年10月末から1年間)。1842年には前述クルークの死によって空席となった哲学教授職をドロービシが兼任することになる。さらにこの年に『経験心理学』(本論文第2節参照)が出版された。

1843年11月頃からドロービシはライプツィヒで既存の学術団体であったヤブロノフスキ協会の改組を考え始めた<sup>15)</sup>。それはやがて別の団体の立ち上げ、という方向に変化する。1846年のライプニツ<sup>16)</sup>生誕200周年の創立を目指して、ドロービシは陰に陽に働き、ほとんどの下準備を行った。その結

---

版部、訳は原書1897年の第5版からの訳。ドロービシの論理学史上の位置については: Lothar Kreiser, “Was denken wir, wenn wir denken? Wilhelm Drobischs Beitrag zur Entwicklung der Logik”, *Abhandlungen der Sächsischen Akademie der Wissenschaften zu Leipzig. Mathematisch-naturwissenschaftliche Klasse*, 2003, **60**(3): 17–25; Risto Vilkkio, “The logic question during the first half of the nineteenth century”, in Leila Haaparanta (ed.), *The development of modern logic* (Oxford: Oxford University Press, 2009), 203–221。

- 14) 「ミーゼス博士 (Dr. Mises)」のペンネームで出版された。英語版 (ウィリアム・ジェイムズの序文付き) からの重訳がある (服部千佳子 訳『フェヒナー博士の死後の世界は実在します』 東京: 成甲書房 2008)。フェヒナーについては、近年日本語で相次いで著作が発表され、その思想史・科学史上の重要性がようやく日本でも知られるようになった (岩淵 2014; 山下恒男『フェヒナーと心理学』 東京: 現代書館 2018)。フェヒナーとドロービシの人生はほぼ重なるので、特に岩淵の著作での当時の状況についての知識は、ドロービシの生涯を理解する上でも役立つ。ちなみに、岩淵の著作ではドロービシのことは全く触れられていない。
- 15) ラテン語で *Societas Jablonoviana*, ドイツ語で *Jablonowskische Gesellschaft der Wissenschaften*。ポーランドの貴族ユゼフ・アレクサンデル・ヤブウォノフスキ (Józef Aleksander Jabłonowski, 1711–1777) によって1774年にライプツィヒに創設された学術団体。名称表記はドイツ語読みを参照した。
- 16) ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646–1716) はライプツィヒ生まれで、ニコライ学院からライプツィヒ大学に進学するという、ドロービシと同じコースを150年ほど前に辿った。後述の7月1日はグレゴリオ暦でのライプニツの誕生日。



果、王立ザクセン学術協会となる組織は1846年5月21日に創設会議の開催にこぎ着けた。しかし、この協会創設に最も重要な貢献をしたにもかかわらずドロービシには重要な役職が与えられなかった。それでも創立日の演説者には選ばれている。王立ザクセン学術協会は1846年7月1日（ライプニツの誕生日）に正式に創立された。この団体は名称を変えて現在でも存続している（この段落：Wiemers 2003）。

1850年にドロービシはヘルバルトの数学的心理学を解説した『数学的心理学の最初の基礎（*Erste Grundlehren der mathematischen Psychologie*）』を出版した。この時、ドロービシはこの本をフェヒナーに送り、フェヒナーから（ミーゼス博士名義で）献辞をもらっている（Neubert-Drobisch 1902: 101-102）。1850年代はドロービシは音楽について研究した。それが前述の音楽論の著作になる。次いで、1860年代には統計学にも関心を持ち、1867年の『道德統計学と人間の自由意志（*Die moralische Statistik und die menschliche Willensfreiheit*）』に繋がった<sup>17)</sup>。1868年には、数学教授を辞め、哲学教授ひとつに専念することになった。この時の数学教授の後任はヴィルヘルム・シャイプナー（Wilhelm Scheibner, 1826-1908）<sup>18)</sup>である。ちなみに、前述メービウスは1844年に天文学正教授になっていて、1868年に亡くなっている。

その後のドロービシはほぼ哲学のみの研究者となる。『ヘルバルトによる哲学のさらなる教育について（*Über die Fortbildung der Philosophie durch Herbart*）』（1876）と『カントの物自体と彼の経験概念（*Kants Dinge an sich und sein Erfahrungsbegriff*）』（1885）、後者は最後の著作となった。この著作の執筆のためにドロービシ（当時83歳）は視力を弱め、「当分の間講義を行うことが免除」された（Neubert-Drobisch 1902: 128）。孫のノイバー

17) 森戸辰男 訳『道德統計と人間の意志自由』、『統計学古典選集第8巻』（東京：栗田書店 1943）所収。この著作の統計学史上の位置については同書における訳者解説を参照：森戸 1943。森戸辰男（1888-1984）は95歳で没した。

18) Deutsche Biographie: <https://www.deutsche-biographie.de/sfzS02751.html>。

ト＝ドロービシは1887年の夏学期に祖父の最後の論理学の教養を受けたという（Neubert-Drobisch 1902: 129）。晩年には数多くの名誉がドロービシに与えられた。

その他のドロービシの研究として、物価統計・物価指数についての功績に關していくつかの論文が見つかる<sup>19)</sup>。

1896年8月に胃カタルに襲われたが、その年の誕生日（94歳になった）までには回復した。けれど、誕生日の翌日に再発し、9月30日午後5時に亡くなった。日記の最後の言葉は当日の天候を記述した「湿った天気」であった。10月4日にパウリナー教会で葬儀が行われた。

大学教員として124学期（1年2学期で62年間！）講義し、週16コマも希ではなかったという。80代まで毎日2時間散歩する健脚の持ち主であった。ドイツ諸国を旅したことはあるが、基本的にライプツィヒとグリマを愛し、そこに生涯留まった。

孫のヴァルターが祖先と祖父の遺品を引き継いだが、おそらくその死後に散逸したか、あるいはどちらかの大战後のどさくさのせいなのか、それらと日記は長く行方不明だった。ところが、日記は1977年にアメリカの古物市場に現れ、ミュンヘンのドイツ史博物館によって購入された（この段落：Wiemers 2003）<sup>20)</sup>。

19) 高木秀玄 1964, 「物価指数算式の原型をめぐって：特にM. W. ドロービッシュの“Über Mittelgrossen und die Anwendbarkeit derselben auf die Berechnung des Steigens und Sinkens des Geldwerthes”を中心として」, 『關西大學經濟論集』, 14(5): 453-491; 高木秀玄 1966, 「物価指数論争史の一局：再びM. W. Drobischの理論を中心として」, 『關西大學經濟論集』, 15(4-6): 289-323; Ludwig von Auer, “Drobisch’s legacy to price statistics”, *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 2010, **230**(6): 673-689; Peter von der Lippe, “Recurrent price index problems and some early German papers on index numbers: Notes on Laspeyres, Paasche, Drobisch, and Lehr”, *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 2013, **233**(3): 336-366.

20) インターネット上で公開されているかどうかは不明。少なくとも簡単に検索に引かかるようなものではないようだ。その他、書簡などはライプツィヒ大学の図書館Bibliotheca Albertinaに所蔵されているが、ネット公開はしていないようだ：<https://www.ub.uni-leipzig.de/standorte/bibliotheca-albertina/>。

1971 年からザクセン科学アカデミー（王立ザクセン学術協会の名称が変わったもの）は、当協会の特別功労者にモーリツ・ヴィルヘルム・ドロービシの名を冠するメダルを授与し讃えている。

## 第 1 節第 2 項 ヘルバルトとドロービシ

この項ではドロービシの生涯の中で特にヨーハン・フリードリヒ・ヘルバルト（Johan Friedrich Herbart, 1776-1841）との関わりを抽出して論じる<sup>21)</sup>。

ドロービシは 1824 年初頭からヘルバルトの著作（どれかは不明）に取り組み、そのファンになっている（Neubert-Drobisch 1902: 21）。理由はわからない。

1827 年の『ライプツィヒ文芸新聞（*Leipziger Literaturzeitung*）』にドロービシは匿名でヘルバルトのモノグラフ「De attentionis mensura causisque primariis」（1822）に対する評論を載せた（1827 年 6 月 4 日第 142 号 1129-1135）。これはドロービシのものである、とハインツェは認めている（Heinze 1897: 6）。これを読んだヘルバルトは喜び、同紙の編集者を介して文通を始めることになったという（Heinze 1897: 6）。同じ新聞に翌日からは『科学としての心理学』への匿名の長文の内容紹介がある（1827 年 6 月 5 日第 143 号 1137-6 月 8 日第 146 号 1161）。これもドロービシが書いてもよさそうに思えるが、おそらくドロービシによるものではない。理由としては、（1）その前の記事（第 142 号の記事）ではヘルバルトの数式をためらわずに引用しているが、この記事ではそれが全くないこと、（2）次の段落で言及される 1828 年のドロービシ署名入り記事では第 142 号の記事のことだけしか言及していないこと、そして（3）同じ評者が同じ著作を 2 度

21) ヘルバルト派心理学の心理学者としてドロービシが言及されるとしても、ほとんど通りすがりにちょっとだけ、を越えない：Boudewijnse et al 2001。この論文でのドロービシへの言及はオトー・クレムの『心理学史』の該当部分そのままである：Klemm 1911: 112-113。

取り上げて評論することは考えにくいこと、などが挙げられる<sup>22)</sup>。

1828年『ライプツィヒ文芸新聞』の11月10日第282号と次の11日第283号にかけてドロービシがヘルバルトの著作『科学としての心理学』の書評記事を書いた。今度は署名入りである（署名は11日分の末にある）。

1830年の復活祭休暇のさいに、ドロービシはヘルバルトに会うためにベルリンに旅行した。同年5月末にはヘルバルトがライプツィヒを訪れている。その時にヘルバルト夫妻がライプツィヒにあまり関心を示さないことに若干不快感を抱いた（Neubert-Drobisch 1902: 27-28）。ドロービシの親友オト・ベルンハルト・キューン（Otto Bernhard Kühn, 1800-1863）<sup>23)</sup>がドロービシのことを〈ひとりヘルバルト学派〉と呼んだのはこの頃である（Neubert-Drobisch 1902: 32）。

その後、文通は続くものの関係は一時冷淡になった。それでも、1834年4月にヴァイマルで再会して再び意思疎通ができるようになった。これがきっかけでドロービシは1834年に『ヘルバルトの哲学体系についての概観への寄与』を出版する。1835年には後に親友となるハルテンシュタイン（Gustav Hartenstein, 1808-1890）<sup>24)</sup>と出会い、4月にはまたヘルバルトと会って、学問から芸術まで広い話題を語り合った（Neubert-Drobisch 1902:

22) その他、「評者は」という書き手の一人称が頻出する（ドロービシの場合少ない）、評者は数学が苦手らしいのを匂わせていること、など。

23) ライプツィヒ生まれ。1828年にライプツィヒ大学で医学博士号を得て、1827年からは同大学の化学の私講師、1829年からは正教授になった。Leipziger Biographie: <http://www.leipziger-biographie.de/wZT>。この人物の父親カール・ゴットロープ（Karl Gottlob Kühn, 1754-1840）もライプツィヒ大学医学教授で、医学史も研究した。Leipziger Biographie: <http://www.leipziger-biographie.de/wUq>。カール・ゴットロープは今日でも便利に利用されるガレノス全集（キューン版と呼ばれる）を編纂したことで知られる。以下の〈ひとりヘルバルト学派〉という表現自体は、そのような意味のことを言われた、というのであって、キューンの言葉そのものではなく、私が作った。

24) ハルテンシュタインはグリマの王立学校からライプツィヒ大学に学んだドロービシの後輩。1833年にライプツィヒ大学で教授資格を得て、1836年から正教授になった。Deutsche Biographie: <https://www.deutsche-biographie.de/pnd116490314.html>。哲学者でヘルバルト主義者。ドロービシとは1851年のスイス旅行に同行している。

44-47)。ドロービシはヘルバルトから哲学を研究するようにけしかけられていた。1837年にドロービシは『数学的心理学問題集I』を出版している。

1837年9月14日から1週間ドロービシはゲティンゲン大学創立100周年記念祭に参加している。ライプツィヒに帰ってしばらくして、ヘルバルト学長下のゲティンゲン大学でいわゆる「7教授事件」が起こった。この時のヘルバルトの態度に関してドロービシは厳しく批判した手紙を送りつけた (Neubert-Drobisch 1902: 56-61)。さらに1839年にも数学的心理学のやり方を巡っていくらかの行き違いがあり、ドロービシはヘルバルトと一時的に断交するに至った (Neubert-Drobisch 1902: 65)。

1841年8月14日にドロービシはヘルバルトの死を知った。日記の中に追悼の辞を書き込んでいる。ドロービシは記念としてヘルバルトの愛用した白磁器のインク入れと彼の書き込み入りのカント『純粹理性批判』を手に入れた。8月18日にはライプツィヒ大学大講堂でヘルバルトの思い出に捧げる講演を行った (Neubert-Drobisch 1902: 76)。ヘルバルトの死をきっかけに、ドロービシは『経験心理学』を書き上げ、1842年に出版した。

1849年にケーニヒスベルク大学教授でヘルバルトの友人だったフリードリヒ・ユリウス・リシュロー (Friedrich Julius Richelot, 1808-1875)<sup>25)</sup>がドロービシを訪問した。これをきっかけにドロービシは数学的心理学に再び取り組むことになった。それが1850年の『数学的心理学』に結実する (Neubert-Drobisch 1902: 101)。

1876年5月4日オルデンプルクでヘルバルト生誕100周年記念祭が行われた (オルデンプルクはヘルバルトの生地)。この記念祭にヘルバルト派最長老のドロービシは間に合ったが、健康上の理由で参加できなかった。かわりに、ドロービシはライプツィヒで300人の学生を集めた記念講演を行った。これが『ヘルバルトによる哲学のさらなる教育について』(1876)と

25) ケーニヒスベルク生まれの数学者。当時ケーニヒスベルク大学の数学教授だった。Deutsche Biographie: <https://www.deutsche-biographie.de/sfz41625.html>。

なった (Neubert-Drobisch 1902: 119–122)<sup>26)</sup>。

## 第2節 ドロービシ心理学の特徴

### 第2節第1項 テクスト

本論文第1節で見たように、ドロービシは心理学の専門家ではない。天文学と数学から哲学へと関心を移行し、そのあいまに一時的に心理学を行った人物である。キャリアの長さのわりにはそう多くない著作の中で、心理学に関するものは1837年の『数学的心理学問題集I』（ラテン語で60ページほどの小冊子、第2巻は出なかった）、1843年の『経験心理学』、および1852年の『数学的心理学の基礎』だけであり、他にヘルバルト著作の書評を含めた心理学の論文がいくらかあるだけである。活動的な心理学者とは言えないだろう。ただ、当時は哲学の範疇にあった心理学へ、理系から参加したというのは珍しい事例である（数学も科学も心理学も当時は哲学の下位分野ではあったものの）。特に数学専攻の人物による理解ある書評をヘルバルトが喜んだことは間違いない。〈ひとりヘルバルト派〉の時代からヘルバルト派心理学普及への第一歩を踏み出したのがドロービシであり、その後のヘルバルト派心理学にいくらかの影響を及ぼしたものと思われる。

本節では、主に『経験心理学』によって、ドロービシの心理学観を探る。この著作の冒頭部分がまさにドロービシの心理学観を語る部分だからである。城戸のように程度詳しくドロービシに言及した心理学史はこの部分を参照している（城戸 1968: 442–446）。

テキストについて。『経験心理学』は前言 (Vorwort) と序 (Einleitung) と「経験心理学」に関する概論部分と5つの部 (Abschnitt) で構成され、

---

26) たとえば、1921年には南部陽一郎が生まれている。2021年に生誕百周年の祝いがあったとしたら、そこに一番弟子がいることはおおいにありうる。南部は1949年から教歴が始まるので、現在90歳ほどの一番弟子が存命かもしれない。もちろんそれは現代の話だ。150年前（荒れ狂うパンデミックやエピソードの中）では珍しいことだったと思われる。南部陽一郎は2015年、ドロービシと同じ94歳で亡くなった。

各部は最大3つのローマ数字による章を含み、序以外は、最大数ページの長さの節（全体で通し番号になっていて、全170節）を含んでいる。本節では主に節のない前言と序（ページ番号はローマ数字）、および節を3つ含む概論部分を扱う。形式は、前言と序の場合は（EP: II）、概論部分は（EP 1: 2）のように節番号を含む。ちなみに、この著作は著者の死後の1898年に第2版が出ているが、出版者の序文1ページが加わっただけで内容は初版と変更されていない。

まず著作全体の構成を把握しよう。前言、序の後に「経験心理学」概論部分（38ページ）があり、その後に7つの部が続く。第1部は表象の起源となる感覚（ここで触覚の意味で「Gefühl」が使われている）と数・論理・空間などの抽象的概念などを論じる（38ページ）。第2部は表象論（95ページ）。第3部が感情論（48ページ）。第4部が欲求論（48ページ）。ここまでが伝統的な経験心理学の区分である。最後の第5部は従来の心理学における能力論への批判とヘルバルト心理学の概説に当てられている（87ページ）。感覚・表象論が大半を占めるものの、感情論や欲求論もそれほど少ないわけではない。

## 第2節第2項 自然科学的心理学の方法

ドロービシは自らの心理学を以下のように呼ぶ：「自然科学の方法に従う一般的人間学的心理学（eine allgemeine anthropologische Psychologie nach der Methode der Naturwissenschaften）」（原文はゲシベルトで強調、EP: 13）。心理学にかかる形容詞の前半にある「一般的」とは病理的な状態ではなく通常の状態を扱うという意味、「人間学的」とは生物としてのヒトの心理学というよりは文化・社会までも含む人間の心的生を扱うという意味である。では後半の「自然科学の方法」とは具体的にどのようなものだろうか。ドロービシは『経験心理学』では数学を使わないやり方で論じると冒頭で宣言している（EP: III）。この著作が普及したら続編『数学的心理学提要、単

純化された表現による (Elemente der mathematischen Psychologie, nach vereinfachter Darstellung)』も続くだろうと言うが (EP: V), そうはならなかった。『数学的心理学』は 1850 年まで出版されない。

ともかく、1830 年代までに自然科学はすでに多数の分野に分かれた〈百科の学〉となってきた。異なる対象を扱うため異なる方法に基づく複数の「自然科学」が成立していたのである。もちろんドロービシはそのことを知っていた。まず、人間の心を扱うので「**有機的自然** (die organische Natur)」(強調は原文) を探究する科学に習うべき、ということになる (EP: 13)<sup>27)</sup>。「有機的」という語は当時も現在もマジカルワードとして便利に曖昧に使用されるが、ここでは〈生命現象に関わる〉という程度の意味であろう。非有機的自然の現象は引力と斥力(磁気や電気の現象では斥力がある)があり、力学的運動の法則で説明できるものだ。その一方で有機的自然ではそれ以上のもの、例えば生命力のようなものを想定する必要がある。つまり、物理学、電気学、磁気学、化学のようなものは非有機的自然の解明には適しているが、生命に特徴的な複雑な有機的自然の解明には向かない。特に、当時のドイツの極端に唯物論的な主張「同じ力が胃で消化し、肝臓で胆汁を分泌し、脳で思考する」<sup>28)</sup>は単純すぎる、としてドロービシは否定する (EP: 13-16)。

有機的自然を研究する学問も 3 種類ある：自然誌 (記述・分類)、解剖学 (分析)、生理学 (説明)。心理学にもこの 3 種類、というよりも 3 つの段階は当然ある。もちろんこのときに、不用意に「能力 (Vermögen)」などを持ち出して説明した気分になるべきではないし、能力の分類に耽るのもよく

27) 以下、ドイツ語の単語を示す場合には、引用元の言及される該当箇所での形をそのままにする。つまり無理に単数第 1 格にはしない。

28) この主張を行ったのはドイツの医師ヨーハン・パプティスト・フリードライヒ (Johann Baptist Friedreich, 1796-1862)。Deutsche Biographie: <https://www.deutsche-biographie.de/pnd118953354.html>。神経の病気である「フリードライヒ運動失調症 (Friedreich's ataxia)」の由来となったのはヨーハンの息子でやはり医師のニコラウス (Nikolaus Friedreich, 1825-1882)。



ない (EP: 16-21)。ヘルバルトの流れを汲むドロービシは、当然ヘルバルト同様に能力論を全否定する。実際、この著作の最後の部はまるまる能力論否定に当てられている (本論文第5節第2項)。

自然誌と解剖学を前段階として生物学あるいは生理学という生命の科学が成り立っているように、心理学にもこの後者の段階があるべきであり、そこでは生理学の方法が用いられるべきである。この生理学は3つの方法を使っている：物理的、目的論的、発生論的。物理的方法とは、生物身体で起こる現象の物理的側面を調べるやり方で、素材的と形式的に分かれる。素材的というのは、たとえば血液の流れは水流一般の力学と同じ理屈が使え、視覚や聴覚には光学や音響学が使えるということ。形式的というのは、物理学で無生物の実験を行うように生物でも実験を行うということ (方法論的とも言えよう)。次の目的論的方法というのは生理学に特有で、何の目的でこうなっているのか、ということを理解できないと生命現象を統一的に把握できないことになってしまうので必要とされる。さらに最後の発生論的方法で、生物の発生の段階を調べることで、有機体 (諸器官) がどのように展開するかという事実を知ることができる (EP: 21-23)。

この生理学の方法を心理学に当てはめてみよう。第一の物理的方法について、素材的なものは当てはまらない (唯物論的に行くのであれば)。形式的物理的方法も難しい。実験によって精神状態の強度の比較を厳密に測定できないから。だが、常に物理学のやり方で心の内的変化の経験の基礎を見出そうとする試みの可能性はゼロではない (EP: 23-25)。ここで我々は同じライプツィヒ大学にいたフェヒナーの『精神物理学 (*Elemente der Psychophysik*)』を思い出すことだろう。だが、その著作が出版されるのは18年後 (1860年) である。次に、心理学の目的論的な扱いとは能力論のことである。これは探究の方法としてはカント以来使用されている (EP: 25)。ドロービシのこの著作でも論じる区分けと順番は能力論のそれらに従っている。心理学の発生論的な扱いとしては、個体発生というよりは系統発生を念

頭に置いているようである (EP: 25-27)。1840年代にはすでにラマルク流の生物進化説が普及してきていた。

### 第2節第3項 経験心理学

このように考えてみても、心理学は自然科学のようにはなれないだろう。ここでドロービシは改めてカントによる心理学批判を持ち出す (EP: 27-29)。だからといって、諦めるには及ばない。なぜなら、心理学は内的経験を直接に観察することができるから。他の分野では得がたいこの直接性に心理学は基づく。なので、カントが批判しようとも心理学に成り立つ余地が充分にある。だからといって、心理学は心的経験の単なる記述に留まるべきではなく、分析し、究極的には理論に展開するべきである (EP: 29-31)。

ここで、経験心理学が改めて論じられる。ドロービシの言う経験心理学は、ヘルバルトが批判したようなヴォルフ流の能力心理学のことではなく、直接観察可能な内的経験に基づく心理学だ、ということになる。今日の我々にとってもこの解釈の「経験心理学」の方が納得できる。そしてドロービシはヘルバルトの2つの心理学著作『心理学教本』と『科学としての心理学』を取り上げて、それを批判的に継承しようとする。それだけでなく経験心理学の導き手として、ディートリヒ・ティーデマン (Dietrich Tiedemann, 1748-1803)<sup>29)</sup>の『心理学ハンドブック (*Handbuch der Psychologie*)』(1804)も推奨している。この著作自体は能力心理学に基づいたものであるが、扱う素材や偏見の無い考察が参照に値する、とドロービシは評価するの

29) 哲学者。北ドイツのブレーマーフェルデ (Bremervörde) 生まれ。ゲティンゲン大学で神学と哲学を学び、1786年からマールブルク大学の教授。Deutsche Biographie: <https://www.deutsche-biographie.de/pnd117376280.html>。

以下で言及される著作の原題は、*Handbuch der Psychologie, zum Gebrauche bei Vorlesungen und zur Selbstbelehrung bestimmt*. Herausgegeben und mit einer Biographie des Verfassers von D. Ludwig Wachler. Leipzig: Johann Ambrosius Barth, 1804. 著者の死後、ルードヴィヒ・ヴァハラー (Ludwig Wachler, 1767-1838) によって編纂されて伝記を付して出版されたもの。編者のヴァハラー (文芸史家で神学者) はマールブルク大学での同僚だった。

である (EP: 31-34)。ドロービシがなぜこの著作を持ち出すのかはよくわからない。ティーデマン個人と何らかの関わりはありえないだろうが、この著作の出版地がライプツィヒだったので手に入れることができたからかもしれない。この著作は3部に分かれ、その第1部がいわゆる経験心理学の部分であり、ドロービシの『経験心理学』と同じ順番で論じられている。といっても、感覚→表象(思考)→感情→欲求という順番は当時のドイツ心理学の通例である(ベーネケが例外だった)。

## 第2節第4項 分類

ここでドロービシの使う用語を整理しよう。この項から引用の際に節番号を入れる。

ドロービシは人間の経験を内的知覚に由来する領域と外的知覚に由来する領域とにわけた。前者が外界、後者が精神界で、両者を媒介するのが身体である。身体を通じて精神界が外的に表出され、その身体の行動などに規則性が見られることから人間精神一般の法則を導くことができる (EP 1: 35-36)。科学的である、ということが、一般法則を見出すことだというのである。

意識の内的観察によって3種類の振る舞い、表象する (Vorstellen)・感じる (Fühlen)・努力する (Streben) があることがわかる (EP 2: 36-37)。これらを表象 (Vorstellungen)・感情 (Gefühlen)・努力 (Streben) あるいは欲求 (Begehrungen) という3つの類に分ける。これらは独立したものでなく、相互に或る程度依存していて、特に表象が基盤になる (EP 3: 37-38)。心的機能の3分割に関して、ドロービシは極めて伝統的である。これはヘルバルトともティーデマンとも共通し、この枠組み自体をドロービシは疑問に思っていなかったことを明らかにする。

### 第3節 ドロービシの感情論 1

#### 第3節第1項 ドロービシの(狭義の)感情論

ドロービシの感情論は『経験心理学』の第3部に集約される。「Gefühl」という言葉自体はそれ以前に「感覚」を示す言葉として第1部などで使用されているが、本論文第2節第2項で挙げた心の大分類の2番目としての「感情」が使われているのが第3部である。この混乱の原因はドロービシの時代のドイツ語の用法にある。おおまかには、感情とは主体の喜び (Genusses) と苦痛 (Schmerzes) の内的状態 (innere Zustände) である。さらに感情には感覚的快から高級な美德に至るまでの様々な多様性があるため、そしてそれらの(本論文の言葉で言えば感情品目の)区別も曖昧であるために、一般的な区別で満足しなければならない(EP 67: 172-173)<sup>30)</sup>。感情の言い換えとしては「気持状態 (Gemüthszustände)」という言い方がときどきなされる (Gemüthに関しては本論文第5節第1項)。ドロービシは特に個々の感情品目の定義を行うのではなく、感情品目をなるべく明確に分類しようとしている。あるいは、分類による定義を目指しているのかもしれない。

なので、いきなり分類から始まる。まず「物質的、感官的 (materielle, sinnliche)」と「非物質的あるいは知的、精神的 (immaterielle oder intellektuelle, geistige)」に分ける。さらに別の分類で「客観的」と「主観的」に分けられる (EP 68: 173)。結果、 $2 \times 2 = 4$  分類ができあがる (表1参照)。

「物質的、感官的」感情には愉快 (Angenehmen) と不愉快 (Unangenehmen) という対比がある。これは主観的にも客観的 (感情の対象に関する) にも与えられる。客観的なものは感官を通じて伝えられる。主観的なものは気分の

30) 本論文でも、ドロービシの使う Gefühl を狭い意味での「感情」と対応させていない。たとえば、Lustgefühl という単語は「快感情」というよりは「快感(覚)」という日本語に対応させた方がしっくりくる場合が多い。

	物質的・感官的	非物質的・精神的
主観的	快／不快（苦） Lust / Unlust (Schmerz)	活気づける／減入らせる belebend / niederdrückend
客観的	愉快／不愉快 Angenehmen / Unangenehmen	表2へ

表1 ドロービシの単純感情表（1）

ような対象を欠く場合である。主観的な場合では愉快・不愉快というよりも、快（Lust）と不快（Unlust）あるいは苦（Schmerz）という名称が適している。この快不快は身体配置（körperlichen Dispositionen）に依存している。さらに間接的に（おそらく身体を介して）精神にも、活気づける・興奮させる、それに対して減入らせる・圧迫する、といった影響を与える。このとき、通常心理学者が行う欲求との結びつけは不要である。たとえば、満腹（＝食べる欲求がない）でも料理の味の良し悪しはわかるし、音楽を知らない（＝音楽への欲求がない）人でも楽器の音色が愉快か不愉快かはわかるので。欲求があるから愉快不愉快があるのではない、というのがドロービシの主張である（EP 68: 173–175）。このため欲求論と感情論が切り離されることになる。

### 第3節第2項 知的感情

表1で「非物質的・精神的・知的」と「客観的」が交わる領域が残された。この部分が従来の感情論の主戦場である。「知的」で「客観的」な感情は複数種類あるので、表2にまとめた（表2参照）。ドロービシが最初に取り

精神的・客観的	愉快	不愉快
観念的感情	美 (Schönen)	醜 (Hässlichen)
道徳的感情	善の選好 (Bevorzugung)	悪の拒否 (Verwerfung)
潜在的的感情	〈開放感〉	〈閉塞感〉

表2 ドロービシの単純感情表 (2)

り上げるのは「観念的 (ideelle)」感情である。ここでも愉快・不愉快に相当する対比が存在し、それは美 (Schönen) と醜 (Hässlichen) である (EP 69: 176)。ドロービシは絵画・音楽・彫刻等の美についていくらか考察するが、リズムと比率に鍵がある程度のことしか言わない。ただ、何らかの美的要素判断 (ästhetisches Elementarurtheil, 美しいとされるものに含まれる基本的な要素) のようなものがある、と考えているようである (EP 70: 176-180)。

次に取り上げるのは「道徳的感情 (moralischen Gefühlen)」である。このとき愉快・不愉快に相当するのが善の「選好 (Bevorzugung)」と悪の「拒否 (Verwerfung)」である (善悪自体は客観的だ、とドロービシは考えているようだ)。この感情は何を為すべき・止めるべきかという判断を生み出し、価値観を決定することになる。この道徳的感情と美的感情は大まかに同じ種類にまとめられる。当然、道徳的感情は倫理学へと繋がるのだが、ドロービシは道義的意志との関連を指摘するだけで深入りはしない (EP 71-72: 181-187)。

さて次にドロービシは、美的感情と道徳的感情とは異なる種類の知的感情として「潜在的 (virtuelle)」感情を取り上げる。この場合、何かをしようとして、それが妨げられたときに感じる閉塞感のような不快と、うまくいったときに感じる開放感のような快が対比される (ドロービシはこれらを表す特定の用語を指定していないので「閉塞感・開放感」という語は私が与えた

ものに過ぎない)。この感情の背後には、或る種の力の感覚 (Kraftgefühl, ここでは「感覚」という日本語の方がしっくりくる)、優越力 (überlegenen Kraft) が発揮されるときに快がある。困難に打ち克つからである。また、余剰力 (überflüssige Kraft) というものもあり、これはダンスのさいなどにリズムに乗り連動して動くことが例として挙げられている (EP 73: 187-191)。ここまでは、いわゆる単純感情と呼ばれるようなものだった。

### 第3節第3項 混合感情

以下は混合的あるいは組み立てられた感情について。ここでは主観的な愉快不愉快と客観的な快不快がそれぞれ入り乱れて (愉快な不快とか、或る快と別の不快とか) 組み合わせが起こる。この組み合わせによって生じるのが感情強化と感情対比である。ドロービシの挙げる例。ディナーパーティの会場だ。豪華な食事と音楽、友人たちとの遊びは愉快と快が集まって強化されている。そこに居る自分が、一仕事終えて将来の見通しも良い状態なら、なお強化される。だが、不安で押しつぶされそうなきはそうではない。ネガティヴ感情に支配されていれば、不愉快になり美への感受性も鈍磨する。学長職を終えたばかりのドロービシにはいくらか思い当たるところがあったのだろう (EP 74: 191-195)。

次の混合された感情としては、記憶や想像に伴う感情である。記憶も想像力も認識の範疇に入るので、認識と混合された感情ということになる。これは連合の法則に従う (EP 75: 195-198)。想像力と結びつくということで、詩的な理解とも結びつく。自然に神々や魂などを見出す、或る種のロマン主義的な理解である。対比されるのは散文的な理解で、自然科学による理解に代表される。もちろん、ドロービシはどちらかが良いと言っているのではないが、どちらかという詩的理解に同情的である (EP 76: 198-201)。

連合に由来する感情として共感がある。同情 (Sympathie)、共感情 (Mitgefühl)、参与 (Theilnahme)、共苦 (Mitleiden, Mitschmerz)、共喜

(Mitfreude) が微妙にニュアンスの異なる類義語としてまとめて扱われ、微妙に区別されている。共感あるいは共感情とは、基本的に他者の感情の模倣である。他者の感情表出の知覚が我々に感情状態の模倣を引き起こす。そのときに、相手の身になって考えることができればそれだけ共感情は強くなる。これが人種差別や動物虐待の理由（共感できないものに対して残酷になれるから）になるし、教養ある人々が外国人に同情的である理由（知識が外国人の振る舞いを共感できるものにするから）でもある（EP 77-78: 201-205）。

以上で狭義の感情論が終わる。

## 第 4 節 ドロービシの情動論

### 第 4 節第 1 項 ヘルバルトの情動論

次に情動論が来るのだが、その前に比較対象としてヘルバルトの情動論を論じなければならない<sup>31)</sup>。

ヘルバルトの『科学としての心理学』は全 2 巻から構成されていて、その第 1 巻は総合、第 2 巻は分析に当てられている。総合とは一般論、分析は従来心理学で取り上げられている諸概念の分類列举のパートである。情動論はその第 2 巻の第 1 部「おもに精神生活について」の第 2 章「情動と情念、ならびに前章の回顧」で扱われる（PW 2 106-108: 98-119）。ちなみに前章である第 1 章は「いわゆる心の 3 主要能力の結びつきについて」（PW 2 103-105: 63-98）である。この第 1 章のほとんどが感情論（PW 2 104-105: 69-98）を扱っている。

第 2 章のタイトルにあるように、情動（Affecten）と情念（Leidenschaften）が一緒に扱われていて、それらはそれぞれが感じること（Fühlen）と欲求

31) 以前ヘルバルトの感情論についての論文（本間 2019）を書いたが、その際に情動論の部分を入れ損ねてしまっていた。以下、PW2 とは『科学としての心理学』第 2 巻の意味。この著作には通しの節番号があり、それと共に（PW2 106）のように言及箇所を示す。



すること (Begehren) の最も強い表出 Aeusserungen (今の綴りでは Äußerungen) として知られている, とヘルバルトは言う (PW 2 106: 100)。つまり, 古典的 3 分割 (表象・感情・欲求) の後者 2 つにそれぞれが属しているということになる。ここで情動と情念の区別はカントと同じである (本間 2017)。ただし, これがヘルバルトの本音だ, というのではない。

ヘルバルトは情動をさらに分析 (分類) する。まず情動の定義: 「**情動とは, 表象がそれらの釣り合い状態 (Gleichgewichte) からかなり離れている場合の気持状態 (Gemüthslagen) である**」 (PW 2 106: 100, 強調は原文)。釣り合い状態からの逸脱という力学的な表現がヘルバルトの特徴である。逸脱であるならば, それはいつか解消されることになるだろう。その方向性で情動は 2 つに分類される。快活な (rüstig) 情動と溶ける (schmelzend) 情動である。快活な情動とは, それが存在しているために意識中に多くの表象を呼び込むことになるというものである。それに対して溶ける情動とは意識から多くの表象を引き出すことになる。「快活な・溶ける」という区分の名称は, 意識に対してどのように作用するかに基づいての命名であって, 情動自体の特徴というわけではない。というよりむしろ, 情動というものが何らかの実体として作用を及ぼすのではない。ヘルバルトの大前提として心には表象しか実体がないからである。表象同士の相互作用から, 一定の表象が解放されて均衡点 (statischen Punkte) から上昇するときの気分状態を「快活な情動」, 下降するときの気分状態が「溶ける情動」と呼ばれる (PW 2 106: 100–101)。表象の動力学的状態についての自己感覚のようなものとして情動が考えられている。

釣り合い状態からの逸脱ということは, 釣り合い状態へと復帰しようとする傾向が速やかに生じることになる。なので, 情動は一時的だ。さらに, 情動の身体的反応 (körperlich Angreifende) も説明される, という。快活な情動では一部の表象の上昇運動によってそれに対する障害が強まり, 溶ける情動では下降する表象にのしかかる他の表象によって強制力 (Gewalt)

が作用する。その強制力が気分状態の変化の速さを加速する。この速さに身体運動への努力 (Anstrengung) が依存している。ただし、どのようなメカニズムで具体的にどのような運動かについての言及はない (PW2 106: 101)。

ともかく、ヘルバルトはここで心理学者たちの通常の見解「情動は増強された感情である (die Affecten seyen gesteigerte Gefühle)」(PW 2 106: 102) を批判的に検討する。つまり「情動は一種の感情だ」という見解で、シタールフォルトの研究でもこの時代に大方共通するものだということをすでに見た (Stalfort 2013; 本間 2017)。もしそうであるなら、情動と感情は同じ尺度 (Maass) を持つだろう、とヘルバルトは考える。この時にヘルバルトが与えるのは天秤棒 (Hebel) の例である。通常「Hebel」はテコのことだが、この場合ヘルバルトは天秤棒を使った天秤を考えているようである。釣り合った状態で天秤棒は地面と水平だ (あるいは鉛直線に対して垂直方向)。釣り合いが崩れると一端が上昇し、他端が下降する。ヘルバルトは言明していないが、このときの上昇が「快活な情動」に相当し、下降すると「溶ける情動」に相当するのだろう。この釣り合い状態からの逸脱自体は感情とは呼ばれないのだ、というのがヘルバルトの主張である (もちろん、情動と呼ばれることになる)。

ではこの喩えで感情は何に相当するか。まず、両側で錘が釣り合って天秤棒が動いていない (地面と水平な) 状態を考える。釣り合っているので天秤棒は動いていないが、力がかかってひねられている (gedreht) 場合がある (今日ならばストレスがかかっている、と表現するかもしれない)。これが感情だ、とおそらくヘルバルトは言おうとしている (明言はしていない)。錘の位置や重さの違いでひねり状態が異なることが、感情の多様性に対応する (PW 2 106: 102-103)。

上記の比喩からもわかるように、感情 (ひねり度合い) と情動 (釣り合いからの逸脱) は異なる尺度を持つことになる。

したがって、〈情動が増強された感情だ〉というのは正しくない。情動と感情には異なった尺度がある。そう、情動と感情は種と属のように共にあるのではない。それらは、非常にしばしば多様に結び付けられているとしても、異なる種類の心の状態の特徴（Bestimmungen）なのである。（PW 2 106: 103, 強調は原文）

このようにしてヘルバルトは感情と情動を切り離すのである。

#### 第4節第2項 ドロービシの情動論

ドロービシに戻る。『経験心理学』第3部は引き続いて、情動（アフェクト）論に入る<sup>32)</sup>。ドロービシの場合、情動論が感情論の中に収まっているのである。

まず、用語の整理。情動＝アフェクト（Affecten）は気持の動き（Gemüthsbewegungen）とほぼ同義で、情動の激しい場合は気持の動揺（Gemüthserschütterungen）とも言い、これは〈気持の平穏（Gemüthsruhe）・落ち着き（Gleichmuth）・均衡（Gleichgewecht）〉の攪乱（Störungen）あるいは変化（Alterationen）である。カントは最初、情動と情念を区別したが、後に感情の強いものが情動であると考えた。ヘルバルトは情動を感情から切り離した（本論文第4節第1項）。ただし、ドロービシ自身はこのヘルバルトによる区別を是認しない。ドロービシは情動の流動性に注目する。それが上記の気持の攪乱や変化という用語に反映されている。情動の流動性は感情の安定性に対置される。つまり時間変化の有無が両者を分けているだけであって、本質は異ならないのだ、とドロービシは考えているようである（EP 79: 205–207）。ドロービシはヘルバルトの区分の変更を元に戻した、ということになる。

32) ドロービシは一貫して「Affect」と綴る。今日では（本論文のキーワードにあるように）「Affekt」と綴るのが普通である。

情動には特有の身体表現がある。激怒する人は血が沸き立つようで、恥じ入る人は赤くなり、驚いた人は青ざめ、臆病な人は震えるなどなど。内的精神的なものと外的身体的なものに対応関係が有り、さらに後者が前者に影響を与える、ということは注目に値する、とドロービシは考える。というのも、身体的変化は、慣性の法則（あの、ニュートンの第一法則だ）に従って急に变化せず、1度起こった興奮がしばらく持続するので、この身体的興奮が精神的な興奮状態を延長させる、ということがあるから（EP 80: 207-208）。ドロービシの言い方は慎重だ。「身体現象（die leiblichen Erscheinungen）があり、そのさいに情動はほとんど身体化されて（verkörpert）いる、そしてその身体現象を本質的なものだと受け取らないように気をつけねばならない」（EP 80: 208）。身体表出が情動の本質でないなら、本質は何かと言えば当然、心的なものだ、ということになる。

情動が平穏状態の攪乱である、というのならば、平穏状態とはどのようなものか。ドロービシはヘルバルトにならって表象の力学に基づいて考える。表象は力を持ち動的であるので平穏とは単なる静止ではない。過度の緊張と弛緩の両極端の間に平穏状態がある。ドロービシはこの比喩をなぜか過剰（Ueberfüllung）と空虚（Entleerung）という両極端に重ねる（この場合平穏状態とは、中間的な量の状態）。なので情動には過剰方向と空虚方向がある。さらに両方向に量的に変位するか、強度的に変位するか、その両方が作用するか、という場合がある（EP 80: 208-209）。

情動出現の心的なメカニズムは心の視野という比喩で語られる。心の視野の中に様々な表象がある。それぞれの表象に固有の量と強度があるが、それだけでは情動にはならない。心の視野内の個々の表象が変化する（強い表象が引き下げられる、あるいは弱い表象が強められるなど）と均衡が破れて情動が出現する。この均衡の破れは一時的で、再び均衡へと向かう。つまり均衡へと回帰する傾向がある（EP 81: 209-211）。

時間的なフェイズを考える（図1参照）。

フェイズ1：まず均衡からの逸脱が生じ、いずれかの方向へと動いていく  
が、回帰傾向のおかげで運動は減速し、  
フェイズ2：どこかで頂点に達してそこで一時停止し、  
フェイズ3：そのあと再び均衡へと戻る運動が生じる。

ドロービシが想定しているのは振り子の運動だろう。振り子について（一度持ち上げて放してから）最も下の点を通過するところから考える。最下点で最高速度になるが、上昇しはじめると徐々に減速していき最も高く上がった点で静止、そしてそこから戻ってくる。フェイズ1が（ドロービシは明言しないが）狭義の情動、フェイズ2は静止状態（驚いて、怒って、恐れて、心の動きが一瞬止まる状態）、フェイズ3は突発（Ausbruch）、揺り戻し。ドロービシはこのフェイズ3を月と満潮の関係（満潮になるのは月が真上を過ぎた後だから）に喩えている。天文学者らしい比喻と言えようか。ともかく外的な刺激がなくなったのに心的な動きが残っている状況を指す。フェイズ1は心の視野に新たに出てきた知覚が引き起こす。心を構成する表象群にも影響を与え、その中には主体（Subject）を構成する表象群も含まれる。主体はいったんは失われ、新しい知覚を含んで再び構成されなおす（EP 82:

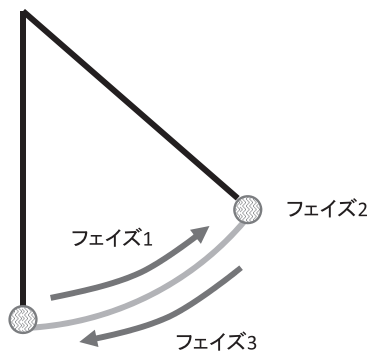


図1 情動の3つのフェイズ

211-214)。ここまでがアフェクトのメカニズムの説明である。ヘルバルトの天秤棒の喩えを、動的に拡張したものと考えることができる。

#### 第4節第3項 ドロービシの情動品目の分類

以下は情動品目の分類。まず過剰方向（表3参照）。主観的なものとしては陽気さ（Heiterkeit）、快さ（Lustigkeit）、はしゃぐこと（Ausgelassenheit）があり、特定の対象を持たない生命力が豊穡であることの情動である。また、対象を持つ（客観的な）ものとしては一群の驚き族（Bewunderung, Entzücken, Staunen, Verwunderungなど微細なニュアンスの相違は私にはわからない）、対象が限定されないものの行動を駆り立てるものとしては感激（Begeisterung, 芸術作品や政治体制の変化などを見て、とにかく何かをしたい！と思う気持）がある（EP 83: 214-215）。これが第一列。

入ってくる表象の活性（Lebhaftigkeit）あるいは高さ（Höhe）による均衡の破れがある。未来を高く見るのが希望（Hoffnung）、未来への企てが可

情動（Affecten）		
過剰（Ueberfüllung）		
第1列	主観的	陽気さ（Heiterkeit） 快さ（Lustigkeit） はしゃぐこと（Ausgelassenheit）
	客観的	驚き族（Bewunderung, Entzücken, Staunen, Verwunderung） 感激（Begeisterung）
第2列	活気	希望（Hoffnung） 大胆（Muth） 怒り（Zorn） 憤懣（Ingrimm） 憤り（Aerger）
第1列と 第2列の 複合	宗教的	希望の魅惑（Entzückung der Hoffnung） 至福の熱狂（Schwärmerei） 感激した大胆（begeisterten Muth） 高慢（Uebermuth）
	怒りの快さ	嘲笑（Spott） 嘲り（Hohn） 怒りの苦笑い（Bittern Lachen des Grimms）
	喜び	

表3 ドロービシの情動表（過剰方向）

能であると信じることの過剰である大胆 (Muth), 後者は自信 (Zuversicht) という快感情を伴う。ただしこれらはまだ行為の準備であって行為自体ではない。同様に行動の準備として怒り (Zorn) がある。自尊心を傷つけられた結果として発生する。この弱いものが憤懣 (Ingrimm) と憤り (Aerger) となる (EP 84: 215–216)。これが第二列。

過剰方向に関する情動の第一列と第二列の複合がある。宗教的な雰囲気では希望の魅惑 (Entzückung der Hoffnung), 至福の熱狂 (Schwärmerei), 感激した大胆 (begeisterten Muth), さらに高慢 (Uebermuth) に至る。怒りの快さ (Lustigkeit des Zorns) は嘲笑 (Spott) と嘲り (Hohn), 怒りの苦笑い (Bittern Lachen des Grimms) がある。喜び (Freude) に向けての複合情動もある。ドロービシは特に品目名は挙げないが、喜びが過剰で破滅に至る系列を記述して見せている (EP 84: 216–217)。

次に空虚方向 (表4参照)。欠乏や少ない量の表象と結びつくのが、痛ましさ (Traurigkeit) あるいは悲しみ (Betrübniss)。ただししばしば何が欠

情動 (Affecten)		
空虚 (Entleerung)		
第1列	主観的欠乏	痛ましさ (Traurigkeit) 悲しみ (Betrübniss) 不機嫌 (Verstimmung) 憂鬱 (Schwermuth) メランコリー (Melancholie)
	客観的欠乏	心痛 (Kummer) 反発 (Widerwillen) 望みが去ること (Hinwegwünschen)
	活性麻痺	意気消沈 (Niedergeschlagenheit) 小心 (Kleimuth)
第2列	希望に対して	恐れ (Furcht) 不安 (Angst) 心配 (Besorgniss)
	怒りに対して	恥 (Scham)
第1列と 第2列の 複合		恐れ+小心=絶望 (Verzweiflung) 悲しみ+心痛=悲痛 (Gram)
		恥+悲嘆=後悔 (Reue) 恐怖 (Schreck) による欠如と弱さ

表4 ドロービシの情動表 (空虚方向)

けているのがわからない。この仲間には不機嫌 (Verstimmung), 憂鬱 (Schwermuth), メランコリー (Melancholie) がある。対象を定めたものとしては心痛 (Kummer), 反発 (Widerwillen), 望みが去ること (Hinwegwünschen)。心の活性を麻痺させるものとして意気消沈 (Niedergeschlagenheit) と小心 (Kleimuth), これらは無力感 (Ohnmacht) ややるせなさ (Mittellosigkeit) といった感情を伴う (EP 85: 217-218)。これが第一列。

過剰方向の第二列にある希望に対応する空虚方向の情動としては恐れ (Furcht) がある。これは対象自体が未知か、その力量が未知なものを避けるということで、無力感に陥ることで動けなくしてしまう。無力感が若干薄らぐと、不安 (Angst) と心配 (Besorgniss) になる。怒りに対応するのが恥 (Scham) で、自尊心の低下である (EP 85: 218-219)。これが第二列。

この方向でも第一列と第二列の複合がある。恐れと小心が絶望 (Verzweiflung), 悲しみと心痛から悲痛 (Gram), 恥と悲嘆から後悔 (Reue) というように。この類でもっとも強いのが恐怖 (Schreck) による欠如と弱さで、この状態では意識にある全てのものが瞬間的に失われ、精神活動が停止し、突然死に至る場合すらある (EP 86: 219)。これで情動論が終わり、広義の感情論も終了する。

## 第5節 ドロービシの感情論2

### 第5節第1項 ドロービシの欲求論における感情的なもの

情動を欲求論から切り離れたにもかかわらず、ドロービシの欲求論には感情を冠する一連の語群が含まれている。たとえば、宗教的感情 (religiöse Gefühle, EP 94: 236-237), 願望 (Wünsche, EP 95: 237-238) など。

しかし、より我々の関心を引くのは、情念 (Leidenschaften) であろう。ドロービシによれば、スピノザとヴォルフは情念と情動を混同していて、カントが初めて情念と情動を切り離れた。「情動の多いところ、情念は少ない」



という経験命題にドロービシは基本的に賛同する。情動は心に表面的な影響しか与えないが、情念はより深く根を下ろす。情動は一時的だが、情念は持続的である。ドロービシはヘルバルトにならって、情念を支配的な欲望と考える (EP 97: 240–243)。

この情念には情念的な愛 (Liebe) と憎 (Hass) がある。情念的な愛とは実らない愛で (気持ちを通じたならば情念にはならない)、この愛がはねつけられると憎になり侮辱 (Schmähsucht) や復讐 (Rachsucht) という行動になる。また、愛を手に入れたからといって安心ではなく、不信 (Misstrauen)、疑念 (Argwohn)、嫉妬 (Eifersucht) に苦しめられる。また様々な享楽を求める欲情 (Wollust)、放蕩 (Ueppigkeit)、享楽欲 (Vergnügungssucht)、浪費癖 (Verschwendungssucht) などがリストアップされる (EP 98: 243–245)。

## 第5節第2項 能力論批判とヘルバルトの感情論

ドロービシは『経験心理学』第5部で能力論批判とヘルバルト心理学の概略を数学抜きで説明している。第5部は3つの章に分かれ、第I章が心理学用語のドイツ語での日常的使用の分析、第II章が心理学的能力論史、第III章がそれらを踏まえてのヘルバルト的な能力論批判と表象一元論が論じられている。

第I章で「Gefühl」か「Affect」を扱ってくれていれば良かったのだが、ドロービシの関心はそこにはない。それでも、いくつかの関連する言葉を拾うことはできる。

いくつかの心理学用語が検討されていくなかに「気持 (Gemüth)」がある。これは心の能動的性質を示す精神 (Geist) に対する受動的性質を示すとされる<sup>33)</sup>。心の感受性を欠くと gemüthlos、その逆に穏やかに刺激されくつろいだ気分になるのが gemüthvoll あるいは gemütlich、気持が激しく動く

33) この区分けはヘルバルトに由来する：本間 2019: 17–18。

こと (Gemüthsbewegungen) と気持の動揺 (Gemüthserschütterungen) が情動 (Affect) やさらに激しいものを示す (本論文第3節第2項参照)。他にも Gemüth や Muth の合成語を列挙する<sup>34)</sup>。最後にまとめとして、「**気持とは心の道義的洗練化 (sittlichen Veredlung) を野蛮化 (Verwilderung) 同様に行える, 感じることと欲求することへの敏感さ (Erregbarkeit) であり, それに依存する内的状態である**」(EP 111: 274-275, 強調は原文) とまとめられる。これは日常的な言語使用に基づくドロービシのまとめであって、学術的な定義ではない。

また、「Sinn」という言葉についての議論にも少し感情と関連するものがある<sup>35)</sup>。このドイツ語の単語はたいへん多義であるがここでは「感覚」という日本語を当てるとしっくりくる場面が多い。ドロービシは「**感覚 (Sinn) とは感覚し知覚する (zu empfinden und wahrzunehmen) という心の才能である**」(EP 116: 283, 強調は原文) と定義している。様々な Sinn を含む単語を列挙しながら、感情の領域に関して「感情がない (Gefühllosen = 日本語での「心無い」に相当)」人を「堅い感覚 (harten Sinn = 日本語での「かたくなな」に相当)」の人と言って非難したり、「感情に満ちた好意 (gefühlvollen Wohlwollenden = 日本語での「心尽くし」に相当)」のことを「柔らかな感覚 (Zartsinn)」と言って賞賛することなどとならんで、心気症の塞ぎ込み (Trübsinn)、メランコリーの人の憂鬱 (Tiefsinn) を挙げている (EP 116: 283-285, 原文の強調は無視で、イタリックは引用者による)。この他は残念ながら感情関係の用語は検討されない。

第II章での能力論史はアリストテレス、ヴォルフからヘーゲルを含む同時

34) Gemüth と Muth に関しては：本間 2017: 54。この本間の論文の上記箇所には誤植があり、「mut」の部分までがイタリックになるべきであった。

35) その前の知性 (Verstand) に関する議論の箇所、ドロービシはドイツ語の日常的使用における知性と感覚 (Sinn) の関係を論じている。或る場合には知性は Sinn の一種と扱われる場合があり、同等な場合もあり、Sinn が低い知性を表す場合もあるという (EP 114: 279-281)。「思考は感覚だ」というような言い回しはドイツ語では自然なのだろう。

代人までが扱われる。このなかでヴォルフの扱いが最も長いのは当然であろう。我々にとって少し関心があるのはベーネケを扱った節である。ドロービシはベーネケに関して、ヘルバルトへの注目を集めさせた点は評価するものの、それ以外は評価しない。ベーネケの難解な用語はヘルバルト理論の焼き直しに過ぎない（たとえば、ベーネケの「原能力」はヘルバルトの言う「単純表象」に他ならないとか）というのである（EP 133: 325-328）<sup>36)</sup>。このとき、ドロービシはベーネケの著作の具体名を挙げていないが、おそらく『自然科学としての心理学教本』初版（1833）を参照していたと思われる<sup>37)</sup>。ベーネケの不明瞭を見ると断罪したくなる気持は分かるが、私は同じほどヘルバルトも分かりにくいと思っている。

そして第三章のヘルバルト表象論の解説に至る。この部分はおそらくヘルバルト本人の著作よりはわかりやすくまとめられているだろう。特に感情に関する部分を抜き出す。表象一元論に立つために、経験心理学で扱われる感情と欲求は表象とは存在論的な立場が異なる。「それら〔感情と欲求〕には一定の表象可能な**何か** (Was), [すなわち] **何性** (Quale) が欠けている。にもかかわらず、それらは実際に意識中にある。それらは**表象すること**の (Vorstellens) 多く変化する**様態** (Wie) として意識中に見出されるに違いない」(EP 143: 348, 強調は原文)。様態として、感情は受動的で欲求は能動的（ドロービシはAufstrebenという表現を使う）である（EP 143: 348-350）。感情は心的实在物ではなく、唯一の心的实在物である表象のあり方についての感覚だ、というドロービシの説明はヘルバルトの考えに沿った（そしてベーネケとも異なる）ものである。

36) 「ベーネケはヘルバルトを何度も利用していた。たいていはその〔ヘルバルトの〕鋭い思考を全く弱めてしまったが。ベーネケは恐れから困難を前にして途中で留まってしまった。そして、新しい概念より多く新しい言葉で独創性を見かけを与えようとした」(EP 133: 328)。

37) ドロービシが言及する「原能力Urvermögen」といった用語は『経験心理学』(1820)にはあまり見られないが、『心理学教本』の第2版ではよく見られるので。

以上で『経験心理学』でのドロービシの感情に関する部分は尽くされる。ここでドロービシが挙げたトピックとベーネケのそれとを比較して気づくことは、ベーネケではかなり熱心に論じられていた崇高に関する話題と笑いについての話題が、ドロービシには全く欠如している、ということである。この差異が単なる好みの違いなのか、何らかの信念に基づく題材の選択に由来するものなのかは不明である。

## 第6節 まとめ

私が一連の論文で非常に参考になっているガーディナー (Gardiner et al. 1937) は、ドロービシについて全く触れていない。なので、この論文はガーディナーの著作を若干補足していることになる。

ドロービシの感情論を概観して分かることは：

(1) ドロービシはヘルバルトの感情論を引き継ぎながらも、変更すべき点を変更していることである。特に情動の位置については、感情と切り離れたヘルバルトに対して、再び感情の中に引き入れるという変更（あるいは復旧）を行っている。

(2) そして、感情品目の分類をヘルバルトより比較的明白に展開している。つらつらと思いつくままに列挙しているというのではなく、明確な軸に沿って2項分割で分類している。なので、若干無理はあるものの、本論文で示したような表にすることができた。

(3) さらに、特にこの情動論に見えるように、ヘルバルト以上に表象の心的メカニズムを具体的に表そうとしている点もドロービシに特徴的である。この点でドロービシの行ったことはヘルバルトの数学的心理学をより力学的なイメージで捉えていたのだ、と解釈することができる。この時の「力学的」と私が表現するのは、単純な唯物論的説明（ドロービシはそれを批判していた）ではなく、機械時計のようなメカニズム（いわゆる機械論）のことでもなく、力学的運動をモデルにして理解しようとするものである。この

時代、ヨハネス・ミューラー (Johannes Peter Müller, 1801–1858) の神経エネルギー説のように力学の用語を用いた説明の方法があった。ヘルバルトの表象の力学も、「力学」ではあるものの、具体的な(画像的な)イメージに乏しいものがあった。天秤棒による喩えがあるものの、まだ明晰性に欠ける。それに対してドロービシは多くの力学用語(慣性の法則や振り子の運動)を用いて、比較的図像的なイメージを描けていると思われる。この工夫には、ドロービシの数学者・天文学者としてのキャリアが十分に生きていると言えるだろう。

最後に。高橋滯子(たかはし・みをこ, 1934–)という心理学者がいる。大学教員としてのキャリアの後半から心理学史に関心を持ち、とくに東北大学のヴァント文庫の調査を経て、1996年に学位論文「ヴィルヘルム・ヴァントに見る科学的心理学の背景と特色」で心理学博士号を得た。この論文は『心の科学史』として東北大学出版会から1999年に出版され、2016年には文庫化された(高橋 2016)。この著作の最後の「補説」にこうある: 「なかでも、〔中略〕ヘルバルトとその後継者たち、とくにドロービッシュの心理学思想とその業績を明らかにする作業が、さしあたり、すぐ次の課題として残されている」(高橋 2016: 239)<sup>38)</sup>。この文章は2021年現在からみて22年前のものだ。その後、高橋はドロービシを扱った論文を書いていない<sup>39)</sup>。なので、私がここでドロービシについて論じたとしても(そしてそれが高橋の期待にそえないものであっても)、それを許してもらえること、そして〈ひとまず叩き台として〉程度には認めてもらえることを願う。

38) このとき、高橋が念頭に置いていたのはドロービシの『数学的心理学』の方であったことは、『心の科学史』の補註(高橋 2016: 354)などから明らかである。「補説」は学位論文審査のさいの質問への返答という性格があるので、1999年の出版で加えられたものであろう。

39) 高橋の論文については: 渡邊芳之, 「高橋滯子の著作について」, 『こころの科学とエピステモロジー』, 2019, 1: 45–48。当該雑誌はオンラインで参照できる: <https://sites.google.com/site/epistemologymindscience/home>。

## ドロービシの心理学著作

*Quaestionum mathematico-psychologicarum fasciculus I.* Lipsiae: Leopoldi Vossii.  
1837

*Empirische Psychologie nach naturwissenschaftlicher Methode.* Leipzig: Leopold  
Voss, 1842 『経験心理学』(EP)

*Erste Grundlehren der mathematischen Psychologie.* Leipzig: Leopold Voss, 1850

## ヘルバルトの心理学著作

Johann Friedrich Herbart, *Psychologie als Wissenschaft, neu gegründet auf  
Erfahrung, Metaphysik und Mathematik.* Erster, synthetische Theil. Königsberg:  
August Wilhelm Unzer, 1824

Johann Friedrich Herbart, *Psychologie als Wissenschaft, neu gegründet auf  
Erfahrung, Metaphysik und Mathematik.* Zweyter, analytischer Theil. Königsberg:  
August Wilhelm Unzer, 1825 『科学としての心理学』(PW 2)

## 参考文献

Boudewijnse, Geert-Jan A., Murray, David J., & Bandomir, Christina A. 2001, “The  
fate of Herbart’s mathematical psychology”, *History of Psychology*, **4(2)**: 107–132

ダニングトン, ガイ・ウォルドウ 1976, (銀林浩・小島毅男・田中勇 訳)『ガウスの  
生涯：科学の王者』東京：東京図書 (Guy Waldo Dunnington, *Carl Friedrich  
Gauss: Titan of science.* New York: Hafner Publishing Co., 1955 の訳)

Gardiner, H. M., Metcalf, Ruth Clark, & Beebe-Center, John G. 1937, *Feeling and  
emotion: A history of theories.* Salt Lake City: American Book Publishing (矢田部

- 達郎・秋重義治 訳 『感情心理学史』 東京：理想社 1964)
- Heinze, Max 1897, *Moritz Wilhelm Drobisch. Gedächtnissrede gehalten in der Sitzung der königlich sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften am 5. December 1896*. Leipzig: S. Hirzel
- 本間栄男 2017, 「日独感情用語とその分類についての一試論」, 『桃山学院大学社会学論集』 **51(2)**: 41-69 (この論文の誤植については、本間 2019, を参照)
- 本間栄男 2019, 「ヘルバルトの感情論」, 『桃山学院大学社会学論集』 **53(2)**: 1-31
- 本間栄男 2020, 「ベーネケの感情論」, 『桃山学院大学社会学論集』 **54(2)**: 31-61
- 岩渕輝 2014, 『生命の哲学 知の巨人フェヒナーの数奇なる生涯』 東京：春秋社
- 城戸幡太郎 1968, 『心理学問題史』, 東京：岩波書店
- Klemm, Otto 1911, *Geschichte der Psychologie*. Leipzig & Berlin: B. G. Teubner
- 森戸辰男 1943, 「訳者解説」, 『統計学古典選集第8巻 (XII) ドロービツシュ 道德統計と人間の意志自由 (XIII) シュモラー 人口統計学及び道德統計の結果について』 東京：栗田書店, 5-49
- Neubert-Drobisch, Walther 1902, *Moritz Wilhelm Drobisch. Ein Gelehrtenleben*. Leipzig: Dieterich'sche Verlagsbuchhandlung
- Stalfort, Jutta 2013, *Die Erfindung der Gefühle: Eine Studie über den historischen Wandel menschlicher Emotionalität (1750-1850)*. Bielefeld: Transcript
- 高橋滯子 2016, 『心の科学史』, 東京：講談社
- Wiemers, Gerald 2003, "Moritz Wilhelm Drobisch und die Gründung der Königlich Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaft zu Leipzig, 1846", *Abhandlungen der Sächsischen Akademie der Wissenschaften zu Leipzig. Mathematisch-naturwissenschaftliche Klass*, **60(3)**: 7-16
- ヴェント, ヴィルヘルム 2002, (川村宣元・石田幸平 訳) 『体験と認識 ヴィルヘルム・ヴェント自伝』 仙台：東北大学出版会 (Wilhelm Wundt, *Erlebtes und Erkanntes*. Zweite Auflage. Stuttgart: Alfred Kröner Verlag, 1921 の訳)
- Zwahr, Hartmut 1987, "Junge Gelehrte und ihre Sorgen: Sozialhistorisches aus Briefen von Carl Friedrich Gauss, 1802-1812, und Moritz Wilhelm Drobisch, 1827-1837", *Abhandlungen der Sächsischen Akademie der Wissenschaften zu Leipzig. Philologisch-Historische Klass*, **71(3)**: 207-225

## Moritz Wilhelm Drobisch on Feeling and Emotion

HONMA Eio

In this paper I aim to make it clear ideas of Moritz Wilhelm Drobisch (1802–1896) on feeling and emotion in his textbooks on psychology, *Empirische Psychologie nach naturwissenschaftlicher Methode* (Empirical psychology following the method of natural science, 1842). Drobisch, as the first Herbartian scholar, succeeded to Herbart's thought on feeling and emotion, *mutatis mutandis*. (1) He rejoined emotion with feeling, opposed to Herbart who had disjoined them. (2) He classified kinds of feelings schematically. (3) he described mechanism of emotion using visual images of dynamic movements.

Keywords : Moritz Wilhelm Drobisch (1802–1896), history of psychology, *Empirische Psychologie nach naturwissenschaftlicher Methode* (Empirical psychology following the method of natural science, 1842), feeling (Gefühl), emotion (Affekt)